

ミスター・フォックス

(イギリス)

レディ・メアリーは、若くて美しい女の人でした。兄さんがふたりと、数えきれないほどたくさん恋人がいました。その恋人たちのなかでもいちばん勇敢で男らしいのは、ミスター・フォックスでした。

レディ・メアリーがミスター・フォックスと出会ったのは、父親のいなかの別荘でした。だれもミスター・フォックスのことをよく知りませんでした。とても勇敢でお金持ちだったので、レディ・メアリーはすぐに好きになりました。やがてふたりは結婚しようと言わしめようになりました。

「結婚したら、わたしたち、どこで暮らしましょう」と、レディ・メアリーは、たずねました。

「わたしの城で暮らそう」と、ミスター・フォックスは答えましたが、きみようなことに、レディ・メアリーや兄さんたちを城に招待したことは、いちどもありませんでした。

結婚式も間近にせまったある日のこと、兄さんたちは家を留守にしました。ミスター・フォックスが、仕事で一日二日、出かけることになったので、レディ・メアリーは、そのあいだに、ミスター・フォックスの城に行ってみることにしました。

あちこちさがし歩いて、ようやく森の中の城に着きました。それは、りっぱな館じょううな館で、高い城壁と深い堀に囲まれていました。城壁の門まで来ると、門の上に、こう書かれていました。

大胆であれ

大胆であれ

とびらが開いていたので、レディ・メアリーは、中庭に入っていました。そこには、だれもいませんでした。建物の入り口まで来ると、とびらの上に、こう書かれていました。

大胆であれ

大胆であれ

けれども大胆すぎてはいけない

レディ・メアリーは、とびらを開けて建物の中へ入っていききました。大広間に広い階段がありました。階段を上り、ろうかを歩いていくと、つきあたりの部屋のとびらの上にも、こう書かれてありました。

大胆であれ

大胆であれ

けれども大胆すぎてはいけない

あなたの心臓の血はこおりつくであろう

けれども、レディ・メアリーは大胆でした。そこで、そのとびらを開けました。すると何があったでしょう。部屋は、血にそまった美しい娘たちの死体と骨でいっぱいだったのです。

レディ・メアリーはこのおそろしい場所からすぐに逃げなければと思いました。とびらをしめ、ろうかをすぎ、階段をかけおり、大広間から出ようとしたとき、窓ごしに、ミスター・フォックスが帰ってきたのが見えました。ミスター・フォックスは、ひとりの美しい娘を引きずって城壁の門から入ってくるどころでした。

レディ・メアリーは階段の下に飛びこむと、たるのうしろにかくれました。そこへ、ミスター・フォックスが娘を引きずって入ってきました。娘は気を失っていました。

ミスター・フォックスは、レディ・メアリーがかくれているたるのすぐ側まで来ました。そのとき、ミスター・フォックスは、娘が指にはめているダイヤモンドの指輪に気がきました。引きぬこうとしましたが、指にしっかりとまっついて取れません。ミスター・フォックスは、ののしりながら剣をぬいてふりあげ、娘の手首に打ちおろしました。手はちぎれて宙を飛び、こともあるうにレディ・メアリーのひざの上に落ちました。

ミスター・フォックスは、あたりをさがしました。が、たるのうしろは思いつきませんでした。あきらめて、娘を引きずって、階段をのぼっていきました。

ろうかを歩いていく音が聞こえるやいなや、レディ・メアリーはしのび足で館をぬけだし、家に向かって走りに走りました。

つぎの日は、レディ・メアリーとミスター・フォックスの婚約の日でした。ごうかな朝ごはんが用意されました。ミスター・フォックスは、席に着くと、テーブルのむかいにすわっているレディ・メアリーにいいました。

「今朝はなんだか顔色がよくないね」

レディ・メアリーは、

「ええ。ゆうべよくねむれなかったの。ひどいゆめを見たものですから」といいました。

「ゆめはさかゆめっていうよ。でも、どんなゆめか話してごらん。きみの美しい声で、ひとときひまつぶしをしよう」

そこで、レディ・メアリーは話しはじめました。

「わたし、ゆめの中で、きのうの朝、あなたのお城に行ったのよ。お城は森の中であって、高い城壁と深い堀に囲まれていたわ。城壁の門の上にこう書かれていたの。

大胆であれ

大胆であれ」

「そんなことはない。そんなことはなかった」と、ミスター・フォックスは、いいました。レディ・メアリーは続けました。

「建物の入り口まで行くと、とびらの上にこう書かれていたの。

大胆であれ

大胆であれ

けれども大胆すぎてはいけない」

「そんなことはない。そんなことはなかった」

「それから、階段を上ってろうかを歩いていったら、つきあたりの部屋のとびらの上にくわ書かれていたわ。」

大胆であれ

大胆であれ

けれども大胆すぎてはいけない

あなたの心臓の血はこおりつくであろう」

「そんなことはない。そんなことはなかった」

「それから、わたしは、そのとびらを開けたの。そうしたら、血にそまった美しい娘たちの死体と骨でいっぱいだった」

「そんなことはない。そんなことはなかった。そんなことがあるものか」

「わたしは、ゆめの中で、ろうかを走り、階段を駆け下りたの。そこへ、ミスター・フォックス、あなたが帰ってきた。美しい娘を引きずって」

「そんなことはない。そんなことはなかった。そんなことがあるものか」

「わたしは階段の下に飛びこんで、たるのうしろにかくれたの。そこへ、ミスター・フォックス、あなたが入ってきた。娘のうでをつかんで引きずりながら。あなたは娘の指輪をぬきとろうとしたんだけど、ぬけないの。そこであなたは、私のゆめの中で、剣をぬいて、娘の手をたたき切った」

「そんなことはない。そんなことはなかった。そんなことがあるものか」

ミスター・フォックスは、立ちあがりました。そのとき、レディ・メアリーがさげびました。

「いいえ、そうなの。そうだったのよ。ここにその手と指輪があるわ」

レディ・メアリーは、ドレスの下から娘の手を取りだして、ミスター・フォックスにつきつけました。

たちまち、兄さんたちと友人たちが立ちあがって剣をぬき、ミスター・フォックスを切りきざんでしまいました。